

日本の公立図書館における公共圏モデルの構築

矢野 光華

近年、公共図書館は課題解決型図書館やコミュニティの場としての役割も求められるようになってきている。図書館を取り巻く社会情勢も刻々と変化しており、特に公立図書館経営も対応を迫られている。こういった動きの中では、具体的で論理的な図書館の本質や役割を改めて示し、これからの図書館のあり方を模索していく必要がある。図書館の使命や役割を公共圏との関係性からとらえる先行研究がある。図書館情報学における先行研究では、公共圏とは、ある共通の関心のもと、市民グループや地域など多種多様なレベルで社会の中に存在しているものである。図書館は、所蔵コレクション等を通じて公共圏を支える役割を担うなど、公共圏と密接な関係があると先行研究で述べられている。

本研究では、先行研究における公共圏の位置づけを基礎として、日本の公立図書館と公共圏との関係性を明らかにしモデル化する。この研究によって、実際に行われている図書館サービスなどから、具体的に公共圏と図書館の関係性を明らかにでき、公共圏の文脈から図書館の使命や役割を具体的に記述することが可能になる。

研究方法は、東京都立中央図書館の発行する年報類(1958年～2015年)を対象とした、質的内容分析である。具体的には、年報中で言及されたサービスや行為にコーディングを行った。公共圏の視点からコードをカテゴリ化し最終的な次元化につなげた。この方法は既にアメリカで行われていた実証研究に準拠している。

結果として、①資料・コレクションの収集・サイクルに関わる次元、②人的資源の啓発及びコミュニケーションに関わる次元、③物理的な場の提供に関わる次元、④公開性の拡大に関わる次元、⑤市民・社会の啓発に関わる次元、⑥図書館の理念・あり方に関わる次元、⑦外部的公共圏という、図書館と公共圏との関係性を示す7次元が明らかになった。どの次元も公共性の重要な条件である、公開性・共通の関心・議論の3条件を中心として発展している。①～⑥の次元は、1つの圏としての機能を有し、外部的公共圏と関わり合いながら展開していると言えた。各次元の特徴や関わりから、最終的なモデル化に成功した。

本研究で明らかになった次元・モデルは、次元ごとの規模は図書館によって異なると考えられる。しかし、各次元は共通してどの公立図書館にも存在していると考えられる。よって現時点では、本研究で明らかになった次元が、日本の公立図書館における公共圏のモデルとして成立すると考えている。

(指導教員 小泉公乃)